デリダと生物学主義の問い

――デリダ『生死』講義を読む

亀井大輔

はじめに

ジャック・デリダの 1975〜76 年の講義録『生死』は、2019 年の刊行前から注目され、多くの読解がなされてきた。とりわけデリダの遺伝生物学についての議論の内実が本講義の登場によって明らかとなったことは、デリダにおける生と死や動物の問題について考えるための重要な契機となるであろう。

この全 13 回の講義は大きく三つのパートから成る。第 1 パートは第 1〜6 回（ジャコブ、ニーチェ、カンギレム）、第 2 パートは第 7〜10 回（ニーチェ、ハイデガー）、第３パートは第 10〜13 回（フロイト）である。一応のところ、各パートあるいは各回の内容は独立して読むことができ、実際に生前のデリダが本講義の一部を抜き出して改稿し、独立して刊行したテクストもいくつかある。しかし連続講義として執筆されている以上、そこには一貫した主題がある。もちろん「生死」というタイトルがそれを表しているわけだが、本稿ではもう少し焦点を絞って、この講義に迫ることにしたい。

本講義を眺めると、この講義を貫通するひとつの問いに、生物学主義の問題があることが浮かんでくる。もちろん通読すればわかるように、この問題は、直接的には第 2 パートの第 7〜10 回において、ニーチェとハイデガーをめぐって展開されているものである。しかしこの関心から読解を進めていけば、それだけではなく、第 1 パート（および第 3 パート）もこの問題と関係するものであり、ひいては、この問題は講義全体に通底するものであるように思われる。本稿は、こうした視点から、講義の読解を試みる。

結論的には、本稿は次のことを明らかにする。すなわち、『生死』講義は、デリダが初期から展開してきた現前の形而上学の脱構築という思考のひとつの反復ないし変奏という性格を持つということ。そして、それは具体的には、デリダの言う意味での「生の哲学」の、すなわち生物学主義の脱構築というかたちで展開されている、ということである。そのために、以下、第 1 節では、デリダが「生の哲学」と呼ぶものについて検討し、第 2 節ではデリダの生物学主義をめぐる議論を考察し、第 3 節では生物学主義の脱構築について論じる。

1. 「生の哲学」

先に述べたように本稿は、生物学主義の問題に注目し、そこから『生死』講義を読解しようとしている。まずはこの視点を明確化するために、第 1 回の講義から、デリダの問題設定の構図を

描き出しておきたい。

デリダはまず「生死」という主題についての説明から始めている。それによれば、この主題はアグレガシオンの当年度の課題「生と死」に由来しており、デリダが選び出した主題というよりは、デリダに課せられた主題である。しかしデリダは、「生と死」というアグレガシオンのプログラムを「このセミネールの――脱構築されるべき――対象としたい」（25/25）と述べ、「生と死」の「と」を外して「生死」と表記し直す。ここにデリダの問題の構図が示されている。

デリダは「生と死」の「と」に、定立、並立、対立、矛盾、弁証法といった関係を見出す。こうした定立的・対立的な論理のなかで、ひとは生と死の境界を考えてきたとされる（20/20）。その論理の典型に当たるのがヘーゲルである。ヘーゲルにおいては、生と死の対立は止揚されて、生は死であるという同一化にいたる。

これに対し、デリダは「生死」と表記することで、定立的な関係の背後に、「ある「生死」の論理」（20/20）があるのではないかと考える。「「生死」の論理」とは、定立の論理に対立するもうひとつの論理ではなく、定立の論理を「効果」として生み出すとともに、自らは定立の論理の背後に身を隠すような、非定立的な論理である。デリダはそれを、対立でも同一化でもないような「もうひとつの他なるトピック」（25/24）と呼んでいるが、後の回で「同一性の論理でも対立の論理でもない論理、すなわち差延」（144/136）と明言しているように、生死の論理とは差延の論理の別名である。

このようにデリダは、〈生と死という形而上学的な概念対立を、生死の論理（差延）によって脱構築する〉という構図を打ち出している。それによって問い直されるのは、生と死の「境界」である。デリダはこの境界を対立として考えることを拒否する、なぜなら「対立の働きはつねに、差異性を消去する効果を持つ」（38/36）からである。デリダはむしろこの境界を差異性の働きとして思考する。「私は諸境界や諸対立（…）をとばす、したがって、同質のものに場を残すためではなく、異質性や差異性に場を残すためにこの対立をとばす、境界-除去〔dé-limitation〕の支持者なのでしょう」（38/36）。

ここから分かるように、これは現前の形而上学の脱構築という、1967 年以来のデリダ自身の問題構成のひとつの反復であり、変奏である。そうすると、『グラマトロジーについて』で提起されたような〈現前の形而上学の時代〉というデリダの歴史的な視点が、『生死』講義でも受け継がれているということになる。では、本講義では、デリダのこの歴史的パースペクティヴがどのように変奏されているのであろうか。

これを考えるために別の著作を参照すると、デリダは『声と現象』（1967 年）で、フッサールの現象学を「生の哲学」[1]とも呼んでいた。その理由は、フッサールにおいて「つねに意味一般の源泉が、生きるという作用として、生きているという作用として、Lebendigkeit〔生きていること〕として明確に規定されている」からだとされる。ここでの「生」とは生物学的な生の概念ではな

[1] Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, PUF, 1967, p. 9.（『声と現象』林好雄訳、ちくま学芸文庫、2005 年、20 - 21 頁。）

く超越論的な生であるが、ともかくデリダは「生の哲学」という語によって、フッサールの現象学が生の概念に依拠していることを示唆している。周知のように、「生の哲学」（philosophie de la vie / Lebensphilosophie）とは一般に、一九世紀末から二〇世紀前半にかけて登場した一連の哲学――ニーチェ、ディルタイ、ベルクソンなど――を指し示す語である[2]。しかし上記のようにデリダがこの語を用いるとき、フッサールがこの「生の哲学」の思潮に含まれると言いたいわけではないだろう。『声と現象』はフッサール現象学が現前の形而上学に所属することを打ち出した著作であることをふまえれば、ここで登場する「生の哲学」とは、むしろ現前の形而上学の有する特徴を表す言葉であり、形而上学のひとつの別名であると受け取ることができる。

『生死』講義に戻ると、実はデリダも本講義で「生の哲学」という語を取り上げている。それは、ジャコブのプログラムの概念を批判的に検討したデリダが、ジャコブのその概念について結論的に述べる指摘のなかにある。

> プログラムの一般概念と類比の価値とを再び練り上げていなかったので、それらはロゴス中心的な目的論によって、人間主義的な意味論によって、生の哲学と私が呼ぶだろうものによって標記されるがままになっている。（41/38）

デリダによれば、ここでの「生の哲学」は、ジョルジュ・カンギレムの「現代生物学は、ある読み方をすれば、何らかの形で生の哲学なのである」[3]という一文の引用だという。参照元を一瞥すれば、カンギレムは、遺伝を情報伝達だとみなす現代生物学をアリストテレスへの回帰とみなし、「生の哲学」だと呼ぶ。ただしカンギレムは、「生体はずっと前からエクリチュールなしに、エクリチュールよりずっと前に、エクリチュールとは無関係に、人類が素描、彫刻、文字、印刷を通じて探求してきたこと、すなわちメッセージの伝達を行なっている」[4]と述べて、遺伝システムからエクリチュールを排除している。それに対しデリダは、『グラマトロジーについて』での「今日生物学者は生きた細胞内の情報の最も基本的な過程に関して、エクリチュールとプロ - グラムを語る」（DG 19/上 27）という自らの文章を対置したうえで、遺伝学における非音声的エクリチュールへの訴えは、アリストテレスへの回帰ではなく、ロゴス中心的機械のあらゆる脱構築を含意していると主張するのである（44/41）。

このように、ここでもデリダは「生の哲学」という語を、現前の形而上学と重なる意味で用いており、それは『声と現象』での用法と同じである。つまり、ジャコブとカンギレムのこれらの言説も、生の哲学に属する、すなわち現前の形而上学の歴史に属するということを、デリダは示唆しているのである。

以上のことを確認することで、デリダはこの講義で、現前の形而上学を生の哲学と捉え、生死

---

[2] 日本において、大正期に生命主義が隆盛となったことも、西洋の動向と関連する同時代的な動きである。

[3] カンギレム「概念と生命」、『科学史・科学哲学研究』金森修監訳、法政大学出版局、1991 年、428 頁。

[4] 同上、425 頁。

の論理でそれを脱構築しようと試みているのだということが理解できる。この確認をふまえて、次節で「生物学主義」を取り上げたい。

2. 生物学主義の問題

本節では、デリダにおいて「生物学主義」の問いとはいかなるものかを明らかにする。

歴史上、一九世紀の終わりに登場した「生の哲学」には、生物学主義という批判がつきまとってきた。すなわち、当時の生物学がもたらした知見――進化論など――を無批判的に利用した、あるいはそれに依拠した思想だという批判である。そのひとつとしてニーチェの生物学主義をめぐる問題をデリダは議論していく。本節ではその議論を検討するが、そのためにまず、デリダによる生物学主義の説明を確認しておこう。

以下が、デリダによる生物学主義の定義を述べる文章である。

> 生物学的科学の真理、その内容と形式が、ひそかにあるいは明白に、他の諸言説の究極の準拠、根拠ないし規範となる（…）。そのとき、すべては生物学的認識へと整序され、すべてはその認識の効果になり、すべての諸言説はそのなかにそれらの最終審級を見出すのです。それこそが先の世紀の終わりから生物学主義の名の下でしばしば指し示されてきたものなのです。（182/173-174）

すなわち、ある言説――たとえばある哲学的言説――が、生物学の真理・内容・形式に準拠しており、生物学的認識がその言説の最終審級となっていること、これがデリダによる生物学主義の定義である。

続いてデリダは、生物学主義の可能性が「形而上学の歴史のすべてに結びついている」という重要な考えを述べている。

> 歴史的可能性としての生物学主義の可能性はそこで生―ピュシス―存在の等価性がつねに働いている以上、形而上学の歴史のすべてに結びついていると思われるのですが、この歴史的可能性はその度ごとに特異な仕方で自らを差異化し、規定しています。（182-183/174）

つまり生物学主義は、形而上学の歴史全体と結びつきながら、歴史上それぞれ特異なものとして登場する。ここから、前節で見てきたようなデリダの「生の哲学」という呼称が、生物学主義と重なっていることが判然とする。要するにデリダにおいて、「生の哲学」と「生物学主義」は、互いに重なり合って、形而上学全体を表すとともに、その特異的な出現――たとえば一九世紀末の生物学主義――をも含む名称なのである。

そして、デリダは次のように述べるが、この一文はきわめて注目に値する。「私は、今日、私たちがいまだ前世紀〔一九世紀〕の終わりに、生物学的科学のあれこれの獲得物との関係において、形成され、停止され、構成された諸規定の歴史的可能性に帰属していると考えています」（183/174）。

以上から、次のようにまとめることができよう。デリダは、西洋の知の歴史という広い視点で見れば、現代のヨーロッパの学問も現前の形而上学（という意味での広義の「生の哲学」）に所属する――と同時にその脱構築も起こりつつある――と考えるが、より近い視点で見れば、現代の学問は一九世紀末からのいわゆる（狭義の）「生の哲学」に依然として属していると考えるのである。その徴候として、デリダは、生物学主義とみなされてきた「ニーチェの、さらに別の視点からはフロイトのような諸言説」が、「現代の生物 - 遺伝学の最新の獲得物を前にしてもなお喚起的な力能ないし正当化を保持している」（174-175 頁）という点を挙げている。『生死』講義の後半で、ニーチェとハイデガーおよびフロイトが議論の俎上に載せられるのは、こうした歴史的パースペクティヴにもとづいてのことである。

このように、デリダにとって生物学主義は、広義の「生の哲学」としての現前の形而上学と重なり合っている。したがって、形而上学の脱構築は、生物学主義の脱構築でもあることになる。それはどのようになされるのであろうか。この問いを踏まえつつ、生物学主義をめぐるニーチェとハイデガーについてのデリダの議論の検討に入ろう（フロイトについては本稿で取り上げる余裕はない）。ハイデガーは生物学主義的なニーチェ読解を批判するが、デリダはその批判を吟味することで、そこに潜む問題を指摘するのである。

デリダは第 7 回から第 10 回までの議論（本講義の第２パート）で、ニーチェの著作と、ハイデガーの『ニーチェ』（クロソウスキーによる仏訳）を読解している。生物学主義をめぐっては直接には第 10 回で論じられるが、その前に、ハイデガーのニーチェ読解に対するデリダの基本姿勢を見ておこう。そもそもデリダにとって、ニーチェは形而上学の解体=脱構築の思想家のひとりである。それゆえ、『グラマトロジーについて』ですでに語られているが（cf. DG 31-33/上 46-48）、ハイデガーのニーチェ論のように、ニーチェを形而上学の完成者として形而上学に閉じ込めることはできないのであり、こうしたハイデガーのニーチェ読解からニーチェを救出しなければならない。この見方が、『生死』講義にも反映されている。

それは「署名」をめぐる議論に見出される。デリダの読解によれば、ハイデガーがその書物を『ニーチェ』と題したことには、以下の考えがある。すなわち、ニーチェという名前は唯一の思想の名前であって、ニーチェの思想の統一があり、それは単一性に起因するものであり、その単一性は西洋形而上学の統一と結びついている（203/195）、というものである。これを突き詰めると、ニーチェの名前は唯一の名前として、西洋形而上学の統一の名前と化してしまうであろう。つまり、ニーチェのテクストにおいては、ニーチェという名の下で、西洋形而上学が自己を語っている、ということになろう。そしてその反面として、ニーチェの「単独的固有名、伝記的なもの、心理学的なもの」（208/200）は非本質的なものとされてしまうであろう。デリダが第 2 回の講義で、ニーチェの署名を複数化するような議論を繰り広げたのは、まさにこうしたハイデガーのニーチェ読解とは対極的な読解を、みずから展開するためであったと思われる。それは、ニーチェの名を西洋形而上学の名前としようとするハイデガーと、それに抵抗するデリダとのあいだで、ニーチェの形而上学への所属をめぐる争いの一場面だと言える。

では、生物学主義に直接関わる議論を検討しよう。ハイデガーは『ニーチェ』で、生物学主義

的なニーチェ読解――たとえばナチのイデオローグによってなされたような――を批判して、ニーチェを偉大な形而上学者とみなそうとする。デリダはその議論に注目して、ハイデガーの生物学主義批判の仕方を検討する。デリダが指摘するのは、ハイデガーの議論は「非常に強力で古典的な図式」（267/255）によって支えられているということである。ハイデガーは『ニーチェ』の「ニーチェのいわゆる生物学主義」という節で、およそ次のように述べている[5]。すなわち、生物学はその科学に固有の対象領域――生けるものの領域――によって画定された科学であり、その科学の研究対象として、規定された対象を有する。他方、その領域を画定するのは、生物学の役割ではなく、あらゆる存在者について問う哲学ないし形而上学の役割である。それゆえ生物学者が「生命とは〜〜である」という領域の画定に関わる命題（領域命題）を提起する場合、生物学者ではなく、その領域を侵犯して、形而上学者として振る舞っているのだということになる。生物学主義とは、こうした領域侵犯のことであり、生物学が形而上学によって基礎付けられることに対する無知のことである。こうした図式にもとづいてハイデガーは、ニーチェは形而上学へと領域侵犯した生物学者ではなく、そもそも形而上学者なのだと主張する。

このような、生物学などの諸科学と形而上学とのあいだの、役割および序列関係を明確にした「分業」体制――「分業」とはデリダによる呼称（第 10 回講義のタイトル）である――にもとづく古典的な学問観を、ハイデガー自身は維持しないであろう。彼は、存在の思考の観点から、存在者を扱うにとどまる学問を批判し、ひいては近代科学全般を批判しているからである。しかしながら、生物学主義的なニーチェ読解に対しては、この古典的な図式を前提にした批判をおこなっている――というのが、デリダによる検討の要点である。そこからデリダは次のように結論する。

> ここで逆説的なのは (…) 一方で、この図式を支える形而上学的存在‐論を脱構築しながら、しかしニーチェの読解をこの図式に従属させ、この脱構築をニーチェに認めようとしないということです。彼はニーチェを偉大な形而上学者にするためにしか、しかも「生物学主義」を形而上学の効果にするためにしかニーチェを生物学主義から救わないのです。（269/257）

このようにして、デリダにとって、ハイデガーの生物学主義批判のあり方は、結局のところ形而上学を頼りにするがゆえに問題含みである、ということが明らかになる。

では、デリダは生物学主義をどのように脱構築しようとするのか。この問いには、第 10 回講義では答えが見当たらない。そこで次節では、第４〜６回のジャコブ読解に立ち戻り、あらためてこの問いに取り組むことにしよう。

3. 生物学主義の脱構築

[5] マルティン・ハイデガー『ニーチェII ヨーロッパのニヒリズム』細谷貞雄監訳、加藤登之男・船橋弘訳、平凡社ライブラリー、1997 年、63‐75 頁。

前節で見たように、デリダの定義する生物学主義とは、生物学の真理に準拠する言説のことである。これを言い換えれば、ある言説が生物学の知見をモデルにしているとき、そこに生物学主義があるということになる。ここには「モデル」というものが重要な機能を果たしている。

実際、『生死』講義において生物学主義の問題が出てきたのは、この「モデル」の問題の延長線上のことである。デリダが言うには、「生物学主義の問いはすでに」、モデルをめぐる議論のなかに「ある仕方で、その命令のなかで手をつけられ、前もって書き込まれ、知られていたのです」（182/174）。よって、モデルをめぐるデリダの議論を検討することで、生物学主義の問いに対するデリダの思考も明らかにできよう。本節では、第４～６回のジャコブ読解に立ち戻って、この課題に取り組むことにしたい。

デリダがその講義でとりあげるのはフランソワ・ジャコブである。ジャコブはフランスの分子生物学者であり、彼自身――1961 年にモノーとともにオペロンモデルを提出することによって[6]――プログラムの概念を遺伝学に持ち込んだ人物である。その彼が、生物学・遺伝学の歴史を構造主義的な視点から描き出したのが、1970 年の著書『生き物の論理』である。

ここで注意しておきたいのは、この著書は、この講義がなされた当時（1975～1976 年）にはまだ新しい、同時代のものであったということである。なぜそのことに注意を促すかと言うと、デリダはこの講義で、一貫して「現代」という時代のことを考えているように思われるからである。少し詳細になるが、そのように考えうるための手がかりを列挙しよう。デリダは第 1 回で、「現代〔modernité〕――私は急ぐために差し当たりそう呼びますが――」（40/37）という言い方で、講義と同時代のことを留保つきで「現代」と呼んでいる[7]。そして第 5 回では、生産／再生産という語は、ジャコブの語であるとともに「すべての現代の言説と同様に」（135/127）と述べて、ジャコブの言説をより広く「現代の言説」のなかに位置づけている。また、「この生産なる語ないし概念は、（…）時代において何らかの仕方で（…）」（137/129）というように、現代を「時代（époque）」という語でも表し、さらには、「「時代」と言うとき私は――他の呼称を用いることを差し控えつつ――別の仕方で名づけることができないような、ある総体を指しています。そして、この時代なる観念を、時代や存在の時代についてのハイデガー的な言説に付随するものとはしていません」（137/129）と念押ししている。さらに決定的なことに、「生産という観念が、現代的な言説の空隙を至るところで埋めている」（136/128）と述べつつ、この生産／再生産をめぐる問いを――たんに「歴史的〔historique〕」だけでなく――「歴運的〔historiale〕な問い」（136/128）と呼び、その理由も説明しているのだ。

これらの語彙は、『グラマトロジーについて』での議論を想起させる。デリダはそこで、形而上学の歴史の総体をひとつの「時代」と呼び[8]、それについての問いを「「historiale な」問い」（DG

---

[6] 遺伝学の歴史におけるジャコブの位置付けについては、ジャン・ドゥーシュ『進化する遺伝子概念』佐藤直樹訳、みすず書房、2015 年、147 - 157 頁を参照。

[7] modernité は日本語で「現代」とも「近代」とも訳しうる。ここでは講義の文脈上、「現代」と訳すことにする。

[8] 「時代」については、次の拙著で詳しく論じたので、ご参照いただければ幸いである。『デリダ　歴

38/上 55）[9]と呼んでいた。この捉え方が『生死』講義にも受け継がれていることは以上から明らかである。それゆえデリダが照準を合わせる先は、ジャコブの書物というより、ジャコブの言説もそれに属するところの、より大きな、その時代の言説の総体である。デリダはジャコブの書物を「この書物（ないしはこの言説、もしくはジャコブが今日、いわば高濃度の、卓越した代表者となっている言説の総体）」（114-115/108）と言い換えているし、明らかにしたいのは「気づかぬうちにこの書物に対して指令を出している機械」だとも述べている。ちなみに第 2 回でも同じような捉え方がニーチェをめぐってなされていたのであり、そこではニーチェの諸々の解釈全体に働く「強力な論理機械」ないし「強力な「論理的」プログラム系〔programmatrice〕」（70/67）が語られ、それは「政治 - 経済的ないしイデオロギー的な歴史の全体の問題」（70/68）だとされている。そのことも併せて考えると、デリダにとって「現代」とは、ジャコブの名前で代表されるような、ある言説の総体であって、その言説を働かせている論理機械ないしプログラム系、およびその言説をとりまく政治 - 経済的、イデオロギー的な歴史全体のことである。逆に言えば、こうした「現代」の特徴を示すものが、現代の生物学の言説なのである。

こうした見方にもとづけば、デリダがジャコブを読解するのは、まさにこの現代の生物学の言説のなかで脱構築が働いていることを描き出すためであろう。デリダは、生命をテクストとみなすジャコブの議論をさらに徹底化させることで、ジャコブの言説に依然として残存する形而上学的な要素を暴き出すとともに、その生き物の論理を生死の論理（すなわち差延の論理）へと変貌させるような読解を繰り広げている。

そのデリダの読解のポイントを二点にまとめておこう。第一点は、テクストという概念を梃子にした、差延の論理の全般化である。ジャコブによると、「今日、遺伝は情報、メッセージ、コードという言葉で記述されている」、「有機体は遺伝によって書き込まれたプログラムを実現するものになる。プシュケーの意図はメッセージの翻訳に置き換えられたのである」[10]とされるように、現代の生物学は、情報科学の諸概念を用いて遺伝を記述している。これを受けてデリダは、「彼〔生物学者〕の究極の指示対象である生き物〔le vivant〕および生産的 - 生殖的〔productive-reproductive〕な構造はいまや、テクストとして分析されている」（110/103）と考える。たとえば、二〇世紀の生物学が発見した DNA においては、四つの単位が「ちょうどテクストに並んだアルファベットの文字のように、鎖に沿って並び替えられている」[11]（113/106 に引用）。遺伝とは、この DNA が一連の指令を伝え、それが解読されることで、生き物の計画を次の世代にメッセージとして伝達するシステムのように考えられる。このように見れば生物学の研究する対象は、たしかにテクストである。

史の思考』法政大学出版局、2019 年、53 - 60 頁。

[9] historiale というフランス語は、ハイデガーの geschichtlich の訳語として「歴運的」と訳されることがある。ただし引用箇所でデリダは、ハイデガー用語としてではなく、ハイデガーから距離をとって、この語を用いている。

[10] フランソワ・ジャコブ『生命の論理』島原武・松井喜三訳、みすず書房、1977 年、1~2 頁。

[11] 同上、260 頁。

しかしデリダはそれにとどまらず、生物学の対象としての生物だけでなく、生物学それ自体も、生物学の主体たる生物学者も、（広義の、デリダの用いる意味で）テクストだと捉えるのである。これは生物学の「テクスト化（textualisation）」と呼ばれる。

> テクストは生物学者と生き物の関係における第三項ではなく、それは――生き物としての――生物学者および生の産物としての科学、そして生き物それ自体に共通の構造としての、生き物の構造そのものなのです。（114/107）

こうしたデリダの見解はいささか突飛なようにも見えるが、しかしデリダの過去の議論を振り返れば、デリダがなにを言おうとしているのかは理解できる。デリダがジャコブ読解で大いに活用する「テクスト」の概念は、周知のように彼が初期から用いていたものである。『グラマトロジーについて』によれば、テクストとは、単なる紙の上の文字や文章だけではなく、「諸々の痕跡の連鎖とシステム」（DG 95/上 128）のことである。そのことを説明するために初期のデリダは、通常の意味でのテクスト（文字情報、文章など）と、差延や痕跡の織物としての「一般的テクスト」（あるいは「テクスト一般」）[12]とを区別している。『生死』講義でも同様に、「狭義のテクスト（これを――通俗的ですが――人間による生産のテクストと呼びましょう）」（160/152）と、「「一般的」と言われるテクスト（明らかに危うい、論争を引き起こすだけの表現です）」（159/151）というかたちで二つのテクストを区別している。後者の一般的テクストとは、言語だけでなく、生き物の再生産にも見られるような「再標記、二重の標記等としての標記のシステム」（158/150）である。こうしてデリダは、「テクストを標記するテクスト以外の参照項を持たないために、外的な参照項を、完全に外部にある参照項を持たないテクスト」という状況こそ、「遺伝生物学のテクストが置かれている状況」（159/151）ではないかと考える。まさに、「テクスト外というものはない」（DG227/下 36）という定式を、ジャコブにおいて例証するのである。

こうした読解の帰結として、生物学の領域は境界‐除去される。というのも、生物の学（bio-logie）は生の記述＝伝記（bio-graphie）でもあり、生や生き物を対象とするあらゆる科学的言説が――人間に関するものを対象とする人文諸科学を含め――生物学と同じテクスト構造を有していることになるからである。こうして、前節で見たような学問の分業体制はもはや維持できないことになる。

第二点として、モデル概念の脱構築である。デリダはジャコブの論証に用いられるモデルの論理に注目して、「モデル概念に対するある種の内的な（つまり内的かつ代補的な）脱構築」（177/168）を論じていく。ここでは読解の詳細は省いて簡単に押さえておこう。ジャコブはテクストをモデルとして生命を捉えているが、その前提には、テクストと生き物は別のものだという考えがある。

---

[12] 「一般的テクスト」（あるいは「テクスト一般」）については、次を参照。Jacques Derrida, *Positions*, Minuit, 1972, p. 61, 82.（『ポジシオン』高橋允昭訳、青土社、1992 年（増補新版）、65、88 頁）および、Jacques Derrida, *Marges - de la philosophie*, Galilée, 1972, p. xix.（『哲学の余白（上）』高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007 年、19 頁）

しかしデリダが明らかにしたように、テクストも生き物も、共通してテクスト構造を有している。そうすると、テクストも生き物をモデルにするという循環構造が生じ、もはやテクストは特権的なモデルではなくなる。デリダは以上を「モデルの循環」として明らかにしている。これを生物学主義の問題に当てはめると、次のようになる。生物学主義とは、生物学の真理を究極的モデルとする言説であるが、以上の議論によれば、生物学は特権的なモデルではなく、モデルの全般的な参照システム（モデルの循環）のなかでひとつの項を占めるにすぎなくなる。

以上の二点の議論を、デリダによる生物学主義の脱構築とみなすことができる。まとめれば、現代の生物学的言説は、第一にテクストの全般化によって、第二にモデルの循環によって、自らを脱構築している。現代生物学をモデルとする生物学主義もまた、その脱構築に巻き込まれ、もはや生物学的真理はモデルとして成り立たないことが明らかとなるのである。

おわりに

以上、生物学主義の問いをめぐるデリダの議論を明らかにした。最後に、それでも残りうる疑問を取り上げて、稿を終えることにしたい。

すでに見たように、デリダの講義は、「現代」の生物学的言説を分析することで、生物学主義の脱構築を浮かび上がらせた。しかし、そのようなデリダの言説もまた、動物や遺伝について語ることで、生物学主義に陥っているのではないか。さらには、デリダの脱構築的言説はこれまで「モデルの論理」によって成り立ってきたのであり[13]、本講義でも、まさにジャコブの言説を現代の言説の「モデル」として扱っているのではないか。このような疑問はつねに起こりうるであろう。デリダ自身、次のように自問している。

> さらにいっそう重大なことに、私自身、そうした生物学主義に屈したのではないでしょうか。生は自らを再生産する、すなわち自らをモデルとして再生産する力能そのもの〈によって〉定義されるゆえに、他の数あるモデルのうちのひとつではないのだということ、あるいは他方で生としてのテクストないしテクストとしての生は数あるモデルではないと主張すること――このことはおそらく、これら〔生とテクスト〕を諸々のモデルの究極のモデルにしてしまいます――によって。（187/174）

デリダがおこなってきた多くの議論において、何らかの「モデル」を用いることはおそらく不可避であっただろう。しかし、デリダの議論が明らかにしたのは、現代において、単純な（ハイデガーの提示する図式にもとづく）生物学主義批判は成立しないということである。生物学の領域を画定する諸境界はさまざまに外へと開かれているし、単純なモデル関係（あるモデルと、それをモデルとするところのもの、という二者関係）は破綻し、モデルの循環構造をなしている。

---

[13] 実際、デリダは何かをモデルとして議論を進めることが多い。『グラマトロジーについて』では「ルソーの時代」が「モデルの有効性を保有する」（DG 8/上 12）と述べている。

デリダの議論の意義は、現代の時代を総体として捉え――言い換えれば、そのために、現代という時代から一歩離れた地点へと進み――、現代の言説が有するこのような状況を示しえたという点にある。

そもそもデリダの思想は、自ら現前の形而上学の時代に属しながら、その時代を超出して、形而上学の脱構築を標記する試みである。本稿の文脈に絞って言い換えれば、デリダ自身も所属する生の哲学の時代のなかで、生物学主義の脱構築的状況を標記する試みである。まさにこの点で、デリダは生物学主義を回避しえていると思われる。

デリダはこの講義以後、ますます生物、動物、遺伝等について語っていくことになるが、そうした言説が生物学主義のような姿を呈する恐れは、つねにつきまとうであろう。デリダが『生死』講義でおこなった以上の議論は、そのような疑念が生じるたびに、振り返って参照されるべきものとしての価値を持つように思われる。

参考文献

デリダの下記の著作からの引用については以下のとおり。なお引用にあたっては日本語訳に従いつつ、論旨の都合上、一部変更をさせていただいた場合がある。

Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967.（『根源の彼方へ　グラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思潮社、上下巻、1972 年）＊略号 DG の後、フランス語原書／日本語訳のページ数を本文中に記す。

Jacques Derrida, *La vie la mort. Séminaire 1975-1976*, Seuil, 2019.（『ジャック・デリダ講義録　生死』吉松覚・亀井大輔・小川歩人・松田智裕・佐藤朋子訳、白水社、2022 年）＊無記号で、フランス語原書／日本語訳のページ数を本文中に記す。